
ウルトラマンコスモス クロスオーバーワールド

春風コンビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンコスモス クロスオーバーワールド

【Nコード】

N5458Z

【作者名】

春風コンビ

【あらすじ】

パラレルワールド

それは、決して交わることのない並行世界。

だがある日、アマノ・ハルカという少女のウルトラマンに対する憧れを何者かに利用され、変わり果てたコスモスの世界へと連れてこられてしまう。

世界を元に戻すため、自分の世界に戻るため、コスモスとハルカの戦いが今始まる。

設定紹介

<世界観>

テレビシリーズのコスモスと同じの西暦2009年。

(テレビシリーズ同様に途中で2010年になる)

アマノ・ハルカは平行ワールドからやってくる。

ハルカの住む世界は、コスモスの放映開始から10年が経った2011年。

コスモスは、平行ワールドではテレビ作品、コスモス世界では現実に存在している。

コスモスはハルカにとって憧れの存在。

<登場人物>

アマノ・ハルカ

16歳。

この物語の主人公。

10年前、コスモスをテレビで見てからウルトラマンが好きになる。
好きなウルトラマンはコスモス、ダイナ、メビウス、ゼロ。

コスモスがテレビ番組として存在する世界からコスモスの世界にやってくる。
平行ワールド

世界を元に戻すため、元の世界に帰るためにEYESに入隊する。

春野ムサシ

19歳。

この物語のもう一人の主人公。

コスモスと一体化しているEYESの隊員。

コスモス世界での8年前にコスモスと心を通わせた経験を持ち、その時に約束した「真の勇者」になるために奮闘するが、コスモス世界に起きた危機を知り、世界を元に戻す戦いにも身を投じる。

ヒウラキャップ

33歳。

EYESの隊長。

考えるよりまずは実践派だがときには豪胆な一面を見せる。

本名は「日浦晴光」

シノブリーダー

28歳。

EYESの副隊長。元防衛軍だが一匹でも多くの怪獣を保護したいという願いからEYESに入隊した。

パイロットとしても優秀。本名は「水木忍」

フブキ隊員

23歳。

シノブと同様に元防衛軍のパイロット。

ムサシとはよく激突するが怪獣保護という信念は同じである。

本名は「風吹圭介」

ドイガキ隊員

25歳。

自称天才科学者と言うだけあって博識で武器開発や作戦立案をする
が、臆病な一面もある。

本名は「土井垣浩次」

アヤノ隊員。

19歳。

ムサシの10ヶ月先輩。通信・分析オペレーターでEYESが所有
するハイエンドコンピュータ「エイジャーMAX」を使いこなす。
好奇心旺盛で子供っぽさを残すが子ども扱いされるのを嫌っている。

本名は「森本綾乃」

設定紹介（後書き）

このほかにも人物は出てきますがメインはこの7人です。正確にはコスモスも入りますが。

ほかは作品中で紹介していきます。

ダイナとメビウスも登場させようと思っています。

これからよろしく願います。

第1話「優しさと強さの英雄」（前書き）

今回より本編スタートです。

この物語は私の思い付きではじめました。

かなり長めになりましたが私のコスモス好きを分かってもらえれば幸いです。

新参者ですが宜しくお願いします。

第1話「優しさと強さの英雄」

西暦2001年7月7日

その日は私にとって忘れることの出来ない日だ。

忘れることのできない理由はある英雄との出会いである。

その英雄は月の優しさと太陽の強さを兼ね備えた巨人、ウルトラマンコスモス。

それをきっかけに私はウルトラマンが好きになり、ウルトラマンダイナ、ウルトラマンメビウス、ウルトラマンゼロも好きになった。コスモスとの出会いから10年。2011年の今、当時6歳だった私は16歳になった。10年経った今でもウルトラマンに対する思いは変わらない。

私の名前は、アmano・ハルカ。ウルトラマンに対する思いは誰にも負けない！！

今日も彼女はコスモスのDVDを見ていた。

「いつ見てもコスモスは最高だ。」

コスモスはTVシリーズが始まってから10年が経ちその記念にメモリアルDVD-BOXが発売されていた。

コスモスはこれまでのウルトラマンと違い、怪獣と可能な限り戦闘を避け、怪獣保護チームであるTEAM EYESと共に保護する。そこにコスモスの優しさが現れている。だが無慈悲な異星人や力オスヘッダーなどに対して、立ち向かうこともある。そんなコスモスとそれを支えるEYESにハルカは憧れていた。DVDを見終えたハルカは片付けながら呟いた。

「コスモスの世界に行けたらいいのになぁー。」

コスモスの世界に行く。それは彼女の願いでもある。コスモスとEYESに憧れているからこそ、その信念に賛同している。彼女は、怪獣たちを保護したいとも願っている。

そんなこととは知らないコスモス世界では・・・。

ここはEYESの基地トレジャーベース。太平洋上に人工秘密基地として建造された。

基地には、人々の気分を落ち着かせてくれる自然が大量にある。春になれば、桜となって心を癒してくれる。

指令室では、隊員たちが休憩していた。指令室は隊員たちのコミュニケーションの場となっているため、全員が休憩をとることは珍しくない。

「久しぶりですね。こうして、お茶するなんて。」

そういつているのはEYESの副隊長のシノブだ。

「まあここ最近は何かと忙しいからな。」

とEYESの隊長のヒウラが続けた。

ここ最近は何かと忙しくなっている。そのため、全員が指令室で休憩することがなかったのだ。

「またジンクスじゃないのか？」

フブキが皮肉交じりに言った。

EYESには変なジンクスがある。それは、誰かが入隊すると何かが起こるというものだ。アヤノが入隊した時も大変なことが起き、ムサシが入隊した時にはカオスヘッダーに襲来されるという嫌なジンクスだ。

「いや誰も入隊してませんよ。」

とムサシが答えた。

ムサシはアヤノと同年ではあるが10ヶ月後輩である。さらにムサシには、誰にも知られていない秘密がある。

ウルトラマンコスモスと一体化していることだ。リドリアスがカオス化してしまった際にコスモスと一体化したのだ。

「でも、これから誰か来るかもしれないね。」

ドイガキが予想して言ってみた。

「でも、これ以上のジンクスは嫌ですよ。ねえ。」

と全員に向かって言ったのはアヤノだ。
すると全員が「うん。」と言わんばかりにうなづいた。
しかし、このところ世界に異変は起きている。

コスモスの世界にいるはずのない宇宙球体スフィアが確認されたり、
検知されることのなかった時空波が検知されたりしているのだ。そ
れにカオスヘッダーも活動している。

これが、世界に危機をもたらしていることには誰も気づく由もなか
った。

ハルカの世界ではすでに夜になっていた。ハルカはすでに寝ていた。
が、不思議な夢を見ていた。

ハルカは、歩いていた。どこと知らない場所を一人で。

「ここは一体？」

すると後ろから声をかけられた。

「アマノ・ハルカ」

ハルカは後ろに振り返った。すると、ウルトラシリーズの映画で見
たことのある白いドレスに赤い靴を履いた少女が立っていた。

「君は、赤い靴の少女！？」

と驚きを隠せない表情で言った。その少女は、それを気にもとめず
に言った。

「あなたのことを必要としている世界があります。」

「私を必要としている世界？」

疑問気に聞き返した。

すると少女の顔が悲しげな顔に変わった。

「その世界は絶対に交わることはない世界が交わってしまっている。
そしてそれはあなたがよく知っている3つの世界・・・」

そう言われたハルカは思い当たるものがあつた。だが、ハルカには
あり得ないことだった。

「まさか、コスモスとダイナとメビウスの世界の融合？」

しかし、少女は答えることもなく続けた。

「急いで。でないと世界が滅んでしまう……。」

「分かった。なら私は行くよ。」

そこでハルカは目を覚ました。すると、部屋の中に夢の中にいたはずの赤い靴の少女がいた。

「うわぁー！」

驚いたハルカはベッドから転げ落ちてしまった。

「大丈夫ですか？」と少女が手を差し伸べてきた。

「ありがとう。」といって立ち上がった。

「君は何者なの？どうして私なの？」

ハルカは疑問に思ったことを聞いてみたが少女は笑みを浮かべるだけで何も答えなかった。

「さあ行きましょう。」と少女が言くと光の扉のようなものが現れた。

ハルカは少女に導かれるままその中に飛び込んだ。

だが、ハルカは自分の思いが利用されたことに気づいていなかった。

コスモスの世界も夜になり、ムサシたちも寝ていた。

このときのムサシは知らないことだがハルカと同じ夢を見ていた。

ライトブルーの隊員服姿のムサシの目の前に赤い靴の少女が立っていた。

「君は？」

とムサシが聞いたが何も答えなかった。すると少女が笑みを浮かべながら言った。

「ウルトラマンコスモス。この世界をよく知る少女が現れる。」

「君、どうして僕のことを？それにこの世界をよく知る少女って。」

「あなたよりこの世界を知っているわ。」

ムサシがコスモスであることには一切答えずに言った。そこでムサシは目を覚ました。

「今の夢は何だったんだ？」

時計を見るとすでに朝になっていた。

とりあえず気持ちを落ち着かせたムサシは隊員服に着替えて部屋を出た。

朝食を食べたムサシはいつものように指令室に入った。

「おはようございます。」

するとフブキがムサシに詰め寄ってきた。

「ムサシ！お前はお子ちゃまか！？何時まで寝てる気だよ！」

アヤノとドイガキがつぶやいた。

「またやってる。どっちがお子ちゃまなんだか・・・」

「うん。そういうフブキだってさっき起きてきたばつかなのに。」

二人が話していたのが聞こえたのかフブキは口パクで「言うな。」

と言った。

「それにしてもどうしたんだ？ムサシが寝坊だなんて。」

ヒウラが聞いた。

「いや、ちよつとおかしな夢を見て。」

「おかしな夢？」

とシノブが聞き返した。

「ええ。随分とはつきりした夢でしたよ。この世界をよく知る少女が現れるって。」

「どういう意味なんだ？」

とヒウラが聞いた。

「僕にもよく分からないんです。でも、最近起こってる異変と何か関係があるかも知れませんか。」

そついい終えた時、指令室に警報音が鳴り響いた。

ドイガキとアヤノがエイジャーMAXを操作して状況を伝えた。

「瀬黒丘陵に怪獣出現！」

「10キロ先には、住宅地があります！」

「よし、TEAM EYES出動！」

「了解！」

格納庫では、出撃準備が行われていた。

EYESのライドメカにはコアテックシステムが採用されている。オレンジとシルバーのコアモジュールを核に前後にパーツを組み合わせることにによりあらゆる場面に対応できる万能メカである。

フブキとヒウラが搭乗するのは前後に赤とシルバーを基調とするA1、A2パーツを取り付けた超高速機動型のテックサnder1号。

一方、シノブ、ドイガキ、ムサシが搭乗するのは前後にB1、B2パーツを取り付けた特殊保護機型のテックサnder2号。このほかに前にA1、後ろにB2パーツを取り付けた特殊支援機型のテックサnder3号、前にB1、後ろにA2パーツを取り付けた特殊高速機型のテックサnder4号がある。

「テックサnder1、オールチェックグリーン。」

「テックサnder2、オールチェックグリーン。」

とヒウラとドイガキが伝えた。

「テックサnder1、テイクオフ！」

「テックサnder2、テイクオフ！」

30分ほどで現場にテックサnder2機が到着した。

怪獣を見て、ドイガキが記憶の中から名前を引っ張り出した。

「あー。あれはゴルメデですね。」

「ゴルメデ？」

とシノブが聞いた。

「ええ。以前SRCが捕獲に失敗した怪獣です。」

以前ゴルメデが出現した際、EYESの母体組織であるSRCが捕獲しようとしたのだがその凶暴性に捕獲することができなかったのだ。

「ドイガキ、例のエネルギー反応は？」

例のエネルギーとは、以前リドリアスを凶暴化させた光のウィルスのことだ。リドリアスに取り付く前には異常なエネルギーで街一つを壊滅させたほどであるために警戒しているのだ。

「カオスヘッダー反応はありません。」

「カオスヘッダー？」

とヒウラが聞いた。

「ああ。あれに名前をつけてみたんですよ。」

「カオスヘッダーか。」

それを見つめる少女がこの世界に辿り着いた。

光の扉の中からアマノ・ハルカが現れた。

「ここは？」

周りを見回すとハルカにとって見覚えのある怪獣が目に入った。

「古代怪獣ゴルメデ！？」

そこで自分が今どの世界にいるのか理解した。

「まさかここはコスモスの世界！？」

しかしそれは有り得ないことだ。さっきまでハルカはコスモスがTV作品として存在する世界にいたのだ。

だがそのありえないは今、覆ってしまったのだ。上空を見るとテックサンダーがいる。

「テックサンダーだ。ゴルメデを保護する気なんだ。」

シノブが異変に気付いた。

「キャップ、地上に人が！」

「なんだと！？逃げ遅れたのか？」

「僕が救助します！」

ムサシがすぐに答えた。

「この状況でどうやって？」

「フブキ、ゴルメデをなるべく引き離すんだ。」

「了解！威嚇弾発射！」

1号機からゴルメデの足元めがけて威嚇弾が放たれた。その隙に2号機は、ハルカの近くに着陸し、ムサシが降りてきた。

「君、早くここから逃げるんだ。」

だがハルカは、目の前にムサシが現れたことに驚いていた。

「え、ムサシ隊員？」

ムサシは初対面のはずの彼女が名前を知っていることに驚いた。

「どうして、僕の名前を？」

すると近くに爆発がおこった。ムサシはハルカに覆いかぶさるように伏せた。

「ありがとうございます。」

「早くここから逃げるんだ。この怪獣は僕らが保護する。」

「はい。この怪獣は凶暴ですからくれぐれも注意してください。」

ムサシは、多くの疑問を抱いたが気にすることなく現場に戻った。

2号機はムサシを降ろしたあとすぐに現場に戻っていた。1号機と共にムサシたちに向かわぬように威嚇射撃をしていた。

「皆、捕獲オペレーションスタート！」

捕獲オペレーションとは怪獣を捕獲するためにとるものことだ。

「了解！麻酔弾発射！」

1号機から麻酔弾が放たれた。怪獣に命中し、地面にうずくまった。その隙にゴルメデ上空に2号機が滞空した。「レーザーネット発射！」

2号機から水色のレーザーをまとったネットが放たれた。これは怪獣に危害を加えることなく捕獲できるものだ。

ゴルメデはネットに入れられたが抗うようにネットを破壊した。その衝撃に耐えられずに2号機が墜落してしまった。

それを地上で見ていたムサシはすぐに行動を起こした。

「リーダー、ドイガキさん。くそっ！」

腰にホルスターされているラウンダーショットの前後にガンユニットを取り付けゴルメデに狙いを定めた。

トリガーを引くと閃光弾が放たれた。

「ゴルメデ、こっちだ！」と言いつつ誘導弾を放った。

ハルカは墜落した2号機に向かっていった。

2号機のコクピットには気を失っているシノブとドイガキの姿があった。

「シノブリーダー、ドイガキ隊員大丈夫ですか？」

すると、2人は意識を取り戻した。

「あ、あなたは？」

「どうしてテックサンダーに？」

「説明はあとでします。今はここから脱出を。」

ハルカに言われるまま2人はハルカと共に脱出した。

「アイツ、1人で無茶しやがって。」

とフブキが愚痴をもらした。

「しかし、2号機が墜落した以上はやるしかない。フブキ、援護だ。」

「了解。」

ゴルメデに攻撃を仕掛けた。だがムサシに向かってゴルメデが攻撃した。ムサシはなんとかかわしたが、追い詰められてしまった。目の前に崖が迫っていたのだ。

「しまった、これ以上は・・・。」

だが無情にもゴルメデに攻撃されてしまった。

「うわぁー!!」

ムサシは崖に落ちてしまったが諦めてはいなかった。

コスモブラックを手になっていた。

「ウルトラマンコスモス！」

すると、ムサシはウルトラマンコスモスとなって、ゴルメデの前に降り立った。

「ウルトラマンコスモス!？」

ハルカは憧れの存在を目の前に期待していた。

「あなた、どうしてコスモスのことを？」

「君はなぜここに？」

2人はハルカに聞いたがハルカは何も答えなかった。

コスモスはファイティングポーズをとると向かってきたゴルメデの攻撃をすべて受け流した。

お返しとばかりに手刀などといった相手を傷つけない攻撃を繰り返して、最後にルナホイッパーでゴルメデを投げ飛ばした。

そしてコスモスは、両手を体の前に持ってきたあとに両手を振り上げ、右手を突き出した。右手から虹色の光線、フルムーンレクトを繰り返した。

フルムーンレクトは、相手を沈静化させる慈しみの光線である。

ゴルメデはすぐに大人しくなった。

「ゴルメデが大人しくなった。」

シノブが安堵の声を上げた。だが安心するのは、まだ早かった。

ゴルメデの頭上に虹色の光のウィルス、カオスヘッダーが現れたのだ。

「あの光は!？」

と言うドイガキの問いにハルカが答えた。

「カオスヘッダー!」

テックサンダーのコクピットでも・・・

「カオスヘッダー!？そんな今まで反応が無かったはずだ!」

ヒウラがあることに気づいた。

「まさか、カオスヘッダーはこれを狙っていたのか!？」

カオスヘッダーはゴルメデから生命エネルギーを根こそぎ吸い取った。

「ゴルメデの生命エネルギーが・・・。」

カオスヘッダーはコスモスがフルムーンレクトを放ってゴルメデが大人しくなるのを狙っていたのだ。ゴルメデがあまりに凶暴が故に

とりつくのは容易でないためだ。

カオスヘッダーはそれを元にカオスゴルメデを作り上げた。ゴルメデとの違いは頭部がカオス化を示す赤に変化していることだ。カオスゴルメデは、後ろにいるゴルメデに向かって強力な破壊光線を放った。ゴルメデはエネルギーを奪われかわす力すら残っていなかったためにまともにもくらしい絶命してしまった。それを見ていたコスモスはカオスヘッダーに激しい憎しみを抱き、次の瞬間、燃えるような赤い光に包まれ強さのコロナモードに変化した。

地上で見ていたハル力たちもその変化に気付いた。

「コスモスが変わった・・・」

「あれは、強さのコロナモード！」

コロナモードとなったコスモスはカオスゴルメデに向かって走った。それに反応するかのようにカオスゴルメデもコスモスに向かってきた。お互いは激しくぶつかったが力ではコスモスが勝っていた。コスモスは、すぐにパンチやキックといった攻撃技を繰り出し、カオスゴルメデを圧倒していった。

「何て強さだ・・・」

「さっきまでとはまるで違う・・・」

カオスゴルメデは反撃と言わんばかりに破壊光線を放ってきたがコスモスのサンライトバリアに阻まれた。コスモスはそのバリアをカオスゴルメデに向けて押し出し、カオスゴルメデを攻撃した。

そしてコスモスは、両腕を頭上に掲げた後、胸の前で回転させて気を集め両腕を突き出した。そこから超高熱火炎の圧殺波動を繰り出した。コロナモードの必殺技、ブレージングウェーブだ。

カオスゴルメデは、まともに受けて爆発した。

「よっしゃ！！カオスヘッダーを倒した。」

「やったー！コスモスが勝ったー。」

フブキとハル力が安堵の声を上げた。

コスモスは戦いを終え、空に飛び去って行った。

戦いには勝ちましたもののEYESの面々はゴルメデを救えなかった悔しさを浮かべていた。

「ゴルメデを救えなかったのは残念だな。」

とヒウラが皆を慰めるように言った。

「ゴルメデを救えなかったけど、ムサシ隊員も・・・」

ハルカは刺激しないように声をかけた。

「あ・・・あのー、私のことお聞きにならないんですか？」

ハルカは出過ぎた真似をしたことや自分のことを聞かないのか疑問に思っていたのだ。その時。

「おい！」とハルカたちの後方からムサシが走ってきた。

「お前どうやって助かったんだよ。」

と突っかかりながらフブキが聞いた。

「コスモスが助けてくれたんです。」

それを聞いたハルカは（ムサシって隠すの下手だなあ・・・）と思った。自分がコスモスって言っているようにハルカには聞こえなかった。

ヒウラは軽く咳払いをして話を戻した。

「そういうええ君の事ちゃんと聞かないとだったね。シノブからは助けてもらったと聞いているが。」

「私の名前は、アマノ・ハルカです。出過ぎた真似をしてすみませんでした。」

「いや、ハルカちゃんは当たり前のことをしたの。謝る必要なんて・・・」

「僕もハルカちゃんに助けられたんだ。何も悪くないよ。」

とシノブとドイガキは責めないように優しく言った。

「でもEYESの機体に触れたようなものですよ。」

とハルカは言った。

「確かにそうだが、今回は不問にしておくよ、ハルカちゃん。」

「本当にすみませんでした!!」

「だから・ハル力ちゃんは悪くないのに・・・」とムサシに言われたハル力を思わず赤面してしまった。憧れのムサシに優しくされたためだ。

「じゃあ皆無事だし、帰還するか。」

「了解!」

「ハル力ちゃん、家まで送るよ。」とムサシに言われたがハル力は困ったように答えた。

「あ・あの私行くアテが無いんです。この世界の人間じゃないんです。」

「どうということなの?」

「私、パラレルワールドから来たんです。詳しいことは後で話します・・・。」

状況を理解できなかったが、ヒウラは彼女を心配して提案した。

「このままトレジャーベースに来るといい。それに世界のことをよく知ってる少女って君かもしれないからこのまま入隊ってのはどうかな?」

その提案にムサシを除く全員が反対した。

「キャップ。こんな子供を我々に加えるんですか?」

「そうですね。今のは軽率だと私は思います。」

「こんな子供を危険な目に遭わせるんですか?」

しかし、ハル力は本気だった。

「私に出来ることがあると思うんです。だからこの世界に紛れ込んだのかも知れません。でも、やれることを精一杯やりたいんです!」するとムサシが優しい笑みを浮かべながら言った。

「分かった。僕も君なんじゃないかって思ってた。この世界をよく知る少女が。僕たちと共に頑張ろう。」

するとハル力はさっきよりも赤面してしまった。

「大丈夫?」とシノブに聞かれたがあまりのムサシの優しさで頭がいっぱいになっていた。

反対していた3人もハル力を認めた。

「これからヨロシクね。ハル力ちゃん。」

「意外なキャップの人選だけどこれからよろしくハル力隊員。」

「まあ足手まといにはなるなよ。」

3人に言われたハル力は落ち着きを取り戻しEYES式の指を2本立てる敬礼をした。

「お、敬礼の仕方知ってるんだな。」とヒウラは感心した。

「ええ、何度も見ていたんで。」とハル力は得意げに返した。

「よし、新入隊員も来たことだし帰還するぞ。」

「了解!!」

新たにハル力を加えたEYESはトレジャーベースに向け、帰還して行った。

第1話「優しさと強さの英雄」（後書き）

TEAM EYESに入隊したハルカ。だがハルカは、世界の危機を知り使命の大きさを知る。

次回、ウルトラマンコスモス クロスオーバーワールド第2話「新たな敵」

3つの世界を取り戻し、未来を切り拓け！

第2話「新たな敵」（前書き）

この回で世界が融合したことが明らかになります。
今回の敵はスフィアです。

前回よりちよつと短めです。

ちなみに前回の後書きの「3つの世界を取り戻し、未来を切り拓け！」は、この物語のキャッチコピー的なものです。

第2話「新たな敵」

カオスヘッダーとの戦いから2日が経っていた。

この2日はムサシ達がゴルメデを救えなかったことに気持ちを整理する時間とハルカの気持ちの整理と入隊準備にあてられていた。

EYESの指令室には、真新しい隊員服に身を包んだハルカとムサシ達の姿があった。

「本日付で入隊することになりました、アマノ・ハルカです。」
改めてハルカは自己紹介した。

「ハルカ、そんな堅苦しいことは抜きでいいぞ。」
とヒウラが言った。

「そうそう。もつとリラックス、リラックス。」

とアヤノが同調するように言った。アヤノとハルカは2日前に会ったばかりだがすでに打ち解けているようだ。

「はい。じゃあ・・・今日から隊員としてよろしくおねがいします！」
「！」

「今日からよろしく、ハルカちゃん。」

とムサシが言ったが、ハルカは全く動じなかった。初めて会った時は赤面していたが今は隊員としての自覚が赤面させていないようだ。ヒウラが席から立ち上がりハルカにこう言った。

「ハルカ。何か抱負でもあるか？」

「はい。EYESでも、すべての怪物が保護できるわけでもないことをゴルメデから教わった気がします。でも、その努力を怠らずに全力で自分達に出来ることをやりたいです。そんな隊員に私は、いえ、全員がなるべきと思います。」

「そうだな、俺達はゴルメデを救おうとしたけど結果的には救えなかった・・・でもその努力を怠ったたらいけないよな。」

ハルカの言葉を聞いたムサシ達は改めて決意を新たにした。

そこでドイガキがハルカに声をかけた。

「ハルカちゃん、ちよつと見て欲しいものがあるんだけど。」

「何ですか？」

すると、ドイガキは2枚の写真を持ってきてテーブルの上に置いた。写真には、銀色の球体のようなものが写っていた。

「この球体に関して聞きたいんだ。今までこの世界のどこにもいなかったんだけど、何か知ってる？」

2枚の写真に写っている物を見たハルカはドイガキに聞いた。

「ドイガキさん、これはいつから現れたんですか？」

「君がこの世界に来る1週間前からだよ。」

ハルカは敵の正体について伝えた。

「これは、宇宙球体スフィアです。」

「スフィア？」

とシノブが聞いた。

「ええ。ですがこれは私がいた世界ではコスモスの中には出てこなかったんです。ウルトラマンダイナというコスモスとは別のウルトラマンの敵として出てきたんです。」

「ちよつと待て。ハルカがいた世界では何人もウルトラマンがいたのか？」

と疑問そうにヒウラが聞いた。

「そうですね、ウルトラマンはシリーズ作品だったんです。30人以上はいますよ。」

「そんなにウルトラマンがいるのかよ。」

とフブキが驚いた。

「話を戻しますけどスフィアは、明確な意思をもって人類に挑戦してきているんです。スフィアがその生物や物質を取り込むことによって生まれるスフィア合成獣を使って。」

とハルカは説明した。

「じゃあ、この世界には存在しないものだと？」
とドイガキが聞く。

「ええ。おそらくはダイナの世界とこの世界が交わってしまったと思います。」

とハル力が答えた。

その頃、宇宙球体スフィアがある怪獣を生み出していた。

周囲の岩石とマグマを取り込み、岩石怪獣グラレーンを生み出した。

「ダイナと僕達の世界の融合なんてとても信じられないよ。」
とムサシが呟く。

「でも現に起こってしまった・・・。立ち向かうしかありません。」
とハル力が言った。

するとドイガキが再び声をかけてきた。

「ハル力ちゃん、それともう一つ聞いてもいいかな？」

「はい。私に答えられることなら。」

ドイガキはエイジャーMAXを操作し、ある電波を見せた。

「この電波もスフィアが現れた時と前後して発信されているようなんだけど・・・。」

「時空波でしょうね。これもコスモスの世界に存在しないものです。」

「じゃあ、そのダイナの世界にはあったの？」
とシノブが聞くがハル力はそれを否定した。

「いえ、ダイナの世界にも存在しないんです。また違う世界のもんです。」

「じゃあ一体どこの世界のものなんだ？」

とフブキが急かすように聞いた。

「フブキ。」とヒウラが注意した。

「この時空波はウルトラマンメビウスというまた違うウルトラマンが存在する世界のもんです。」

とハル力は説明した。

「じゃあ、そのメビウスの世界も混ざってしまったの？」

とアヤノが聞いた。

「そうですね。それと私がいた世界も……。その原因を突き止めて倒さないといこの世界が滅んでしまいます。交わるはずのなかった世界が交わってしまったせいで。」

その言葉にEYESの全員が驚愕した。

「そ・そんな……。」「

「世界が滅ぶって……。」「

「だから、私がこの世界に紛れ込んでしまったのかもしれませんが。コスモス、ダイナ、メビウスの3つを知っている私だからこそ世界を元に戻せるかもしれないから。」

そこでムサシが口を開いた。

「そうだとしてもハルカちゃんだけが抱え込む必要は無いよ。」

「分かっている。だから私はEYESで自分に出来ることを精一杯やるって決めたの。皆と協力してね。」

ハルカは世界の現実を受け入れ、使命の大きさを実感した。

指令室に警報音が鳴り響いた。

「D5エリアに怪獣出現！」

とアヤノが伝える。

「メインモニターに出します。」

とドイガキが言いキーボードを操作して、モニターに映し出した。モニターにはごつごつとした岩石がそのまま生物になったような怪獣が映し出されていた。体には赤いラインが入っている。

「この怪獣は岩石怪獣グラレオン！スフィア合成獣です！」

ハルカが伝えた。

「これがスフィア合成獣……。」「

「ええ。残念ですがスフィア合成獣は倒すしかありません。EYESの信念は理解していますが人類の進化を快く思っていない存在なんです。」

「じゃあ、心置きなくぶつ潰せるわけだな。」
とフブキが攻撃的に言った。

するとアヤノが声を張り上げた。

「キヤップ、近くには高純度エネルギー貯蔵施設があります！」

「なんだと！？よし！なんととしても施設を守るぞ！EYES、出勤！」

「了解！」

ヒウラとフブキは1号機、シノブとドイガキは2号機、ムサシとハルカは4号機に搭乗している。

現場に到着したのと同時に状況確認をした。

「エネルギータンクは無事です。しかしこれ以上はグラレーンを近づけると危険です。奴は火炎放射しますから。」

とハルカが伝えた。

「了解。フブキ、ムサシが威嚇弾で怪獣の注意を引き付け、シノブが誘導弾でタンクから遠ざけるんだ。」

「了解。」

返答のあとすぐに1号機と4号機から威嚇弾がグラレーンの足元に放たれ、2号機から誘導弾が放たれたがその進路が変わらなかった。ヒウラは決断した。

「コンディションレベル・レッド、攻撃開始！」

その合図と共に3機からブライトレーザーが放たれた。グラレーンは攻撃されるが全くひるむことなくテックサンダー3機に火炎放射で応戦してきた。3機は何とか攻撃を避けてることができた。

そこに宇宙球体スフィアが10体現れ、テックサンダーに攻撃をしてきた。

「各機、散開して回避するんだ！」

「了解！」

回避運動をとった1号機と2号機は回避できたが4号機はわずかにそれが遅れ、被弾して墜落してしまった。

「きゃああああ。」

4号機のコクピットに火花が飛び散りハルカは悲鳴を上げた。

「しまった・・・。」

4号機は地上を50メートルほど滑ってようやく止まった。ハルカは墜落の衝撃に耐え切れずに意識を失っていた。

「ハルカちゃん、しっかりして。」

しかし、ハルカは意識を失ったままだった。そこにキャップから通信が入った。

「ムサシ、ハルカ、応答しろ！」

ムサシが左腕に装着されている小型通信機EYESペーサーでヒウラに返した。

「キャップ、僕は大丈夫ですがハルカちゃんが気を失ってるんです！」

「何！？シノブ、ドイガキは4号機の防衛を頼む。」

「了解！」

「フブキはグラレーンに攻撃！エネルギータンクを守るんだ！」

「了解！」

2機からブライトレイザーがほとばしった。

4号機の中にいるムサシは、コスモブラックを取り出してコスモスに言った。

「コスモス、僕はスフィアが許せない。ハルカちゃんをこんな目に遭わせたんだ。皆を守るために行こう！」

すると、コスモスもそれに応えてくれた。

「私も君と共に守るための戦いをする。」

ムサシはコスモブラックを手にした右手を振り上げ、先端が開かれた。

「コスモオオオオス！！！」

グラレーンの前に青き巨人、ウルトラマンコスモスが降り立った。

「コスモス！」

とシノブが期待の声を上げる。

コスモスはすぐにコロナモードにチェンジし、グラレーンに向かった。グラレーンはコスモスに対し、火炎放射をしてきた。コスモスはそれをジャンプすることでかわし、グラレーンの進行を阻むべく押さえ込んだ。コスモスがグラレーンの体に触れた瞬間赤いラインが輝き高熱を発した。コスモスは手を火傷し、グラレーンから離れたがすぐに攻撃をした。コスモスのパンチやキックなどの連続攻撃にグラレーンは徐々にタンクから遠ざけられていった。

「コスモスは、タンクに気づいて遠ざけさせてるんだ。」
とドイガキが解説した。

「よし、グラレーンをこのまま遠ざけさせるぞ！」
とヒウラが指示を飛ばした。

「了解！」

テックサnderがコスモスへの援護射撃のブライトレーザーを放った。グラレーンは追い討ちをかけられ、エネルギータンクから完全に遠ざかった。

その際にコスモスは必殺技のブレイジングウェーブを放った。

しかし、コスモスとEYESは驚愕の光景を目にした。ブレイジングウェーブがバリアに完全防御されたのだ。

コスモスが愕然としている隙にグラレーンは火炎放射を放ってきた。コスモスはサンライトバリアで防いだがカラータイマーが鳴り始め、徐々に後方に押された。

コスモスは地上では3分間しか活動できないがコロナモードで戦っているためにエネルギーの消耗が激しいのだ。

「コスモスが押されてる。援護だ！」

「了解！」

テックサnderからブライトレーザーが放たれ、火炎放射をしていたグラレーンはまともに喰らった。グラレーンは後方に押しやられ火炎放射を解除せざるを得なくなった。コスモスもサンライトバイアを解除し、ブレイジングウェーブと違うモーションをとった。両腕に宇宙エネルギーを集結させ、両腕を交差させて光線を放った。

コスモスコロナモードの最強の技であるネイバスター光線だ。
グラレーンはバリアを展開させて防御したが、コスモスが放った光線の膨大なエネルギー量にバリアがガラスのように割れ、グラレーンに命中し爆発した。

「よっしゃー！」

「やったー！」

とフブキとドイガキが歓声の声を上げた。

コスモスは戦いを終え空に飛んでいった。

「それにしても凄いエネルギーね。」

とシノブが驚きの声を上げた。

「さすがにあれだけのエネルギーを防御しきれなかったんだ。」

とドイガキが解説した。

「すぐにムサシとハルカの救助だ。」

とヒウラが指示を飛ばした。

「了解！」

宇宙球体スフィアは負けを認め姿を消した。

戦闘を終え、コスモスの姿からムサシの姿に戻っていた。

ムサシは墜落した4号機に戻り、ハルカを機体から恥ずかしながらおぶって降ろした。

「ごめんね・・・ハルカちゃん。こんな目に遭わせて・・・」

と呟いたがハルカからの返事は無かった。意識があれば「気にしないで、ムサシ。」と言っただろう。

「おい、大丈夫かー？」

とヒウラが叫んでいた。

ムサシは右手を挙げて居場所を伝えた。すると全員がムサシの元に集まってきた。

「ハルカちゃんは？」

「たぶん打撲とかしてると思うんですが大して怪我してないと思います。」

「そうか。一応メディカルセンターに連れてくか。」

「そうですね。」

ムサシたちは、トレジャーベースに向け帰還していった。

「ムサシ、ハルカちゃん大丈夫なの？」

とアヤノが心配そうに聞いた。

「うん。打撲したのと墜落のGに耐えられなかったみたいで大したことは無いって。」

と安心させるようにムサシが答えた。

その会話が聞こえたのかハルカは意識を取り戻した。

「ここは・・・？」

「気がついた？」とアヤノが聞いた。

「良かった。意識が戻って。」とムサシが胸を撫で下ろした。

ハルカは体を起こして改めて聞いた。

「ここは・・・いつたい・・・」

その問いにアヤノが安心させるように答えた。

「メディカルセンターだよ。怪我は打撲だけで大したこと無いって。」

「

「そうですか。」

「ごめんね。怪我させちゃって。」

とムサシが謝罪した。

「気にしないで、ムサシ。こういうのも防衛隊らしくっていいじゃん。」と笑顔で返した。

そこにヒウラ、シノブ、フブキ、ドイガキの4人が入ってきた。

「お、意識戻ったみたいだな。」

とヒウラが言った。

「ええ。おかげさまで。」

「ハルカちゃん、いい事教えてあげよつか？」

とドイガキが不適な笑みを浮かべながら言った。

「いい事ってなんですか？」

ドイガキがふふんと鼻をならして問いに答えた。

「ハルカちゃんのことをムサシがおぶって降ろして来たんだよ。」

「ちよつと、ドイガキさん！それは言わないって言ったじゃないですか！」

と慌てた様子でムサシが注意した。

ハルカは思わず赤面してムサシ達から目線をそらし、布団の中に潜り込んだ。

「ハルカ隊員ったら恥ずかしがってるわよ。どうするの、ムサシ隊員。」

とシノブが言った。

「えええ、僕ですか！？」

「なんとかしろよ。ムサシ。」

「そうよ。しっかりしなさいよ。」

とフブキとアヤノが言った。すると布団からハルカが出てきた。

「ムサシ、ありがとう。」

「あ・・え・・いや、とにかく良かったよ無事で。うん。」

ヒウラが軽く咳払いしてハルカに聞いた。

「ハルカ、明日から復帰できるな？」

「大したこと無いので大丈夫です。」

ムサシ達とハルカの間に確かな絆が生まれていた。

第2話「新たなる敵」(後書き)

大熊山に現れたバードン。コスモスは立ち向かうが猛毒をあびてしまい、ムサシもその影響を受けてしまう。かつてウルトラマンを倒したバードンにEYESは、コスモスは、立ち向かえるのか。

次回、ウルトラマンコスモス クロスオーバーワールド第3話「逆境を打ち破れ！」

3つの世界を取り戻し、未来を切り拓け！

第3話 「逆境を打ち破れ！」（前書き）

なんか、カードゲームのサブタイみたいです。がそれなりに仕上がり
ました。

ちよつと長めになっています。

第3話 「逆境を打ち破れ！」

ハルカがEYESに入隊してから1週間が経ち、ようやく基地内を把握出来てきたようだ。

指令室にはヒウラ、アヤノ、ハルカの3人がいてそれぞれのデスクワークを行っていた。シノブとフブキとドイガキとムサシは、先に昼休みに入っていた。EYESは人数が少ないためにこうして順番に休憩を取っているのだ。時には、全員で休憩することもあるが。ヒウラがEYESペーサーに付いている時計を確認した。すでに12時半を回っている。

「アヤノ、ハルカ、そろそろ休憩に入っていぞ。」

「はい。」

とハルカが返事をした。

「ハルカちゃん、一緒にご飯食べない？」

とアヤノが笑顔で聞く。

「そうですね。1人より2人の方が楽しいですもんね。」

と笑顔でハルカが返して2人は指令室を出て行った。それと同時に先に休憩に入っていた4人が戻ってきた。戻ってくるなりドイガキが口を開いた。

「あの2人、仲がいいんですね。」

「あの2人は年も近いし、女の子同士だから気が合うんですよ。僕も年は近いですけどね。」

とムサシが言った。

「でも彼女の情報が役に立っているのは事実ですよね。」
とシノブがハルカを褒めた。

「お子ちゃまのくせにどっちが本性なんだか・・・」

とフブキが皮肉交じりに言った。

「そうだよな。ハルカちゃんは、凄いと思う。さすがファンというだけはある。」

とヒウラも褒めた。

「では、今後も活躍してもらおうと?」
とシノブが聞いた。

「ああ、でも彼女の話も聞かないといけない。決めるのはハルカちゃんだからな。」

食堂では、アヤノとハルカが楽しそうに食事をしている。アヤノとハルカはミートスパゲティを食べている。

「ハルカちゃん、EYESに入っただろう?」

「意外と緊張してないんで気持ち的には楽です。でも飛行訓練が慣れませんか。」

とハルカが感想を言った。

「そっか。私達、キャップがあんな感じだから緊張しないんだろうね。でも飛行訓練が慣れないのは一緒だよ。」

「アヤノさんですか?」

「うん。普段はオペレーターだからね。でもリーダーの指導でなんとかだけど。それと、あたしのこと、さん付けしなくていいよ。」

とアヤノが同調と注意をした。

「じゃあ・・・アヤノ・・・」

と戸惑いながら言った。

「それでよし。あ、そろそろ休憩も終わりだね、戻ろっか。」
「戻りますか。」

「ただいま戻りました。」

とアヤノが伝えた。

「戻りました。」

とハルカも伝える。

「お、噂の2人が戻って来たな。」
とヒウラがからかった。

「噂の2人?」

とアヤノとハルカが同時に首をひねった。

「ああ、気にしないで。こういうのキャップの余興だから。」
とシノブが言った。

「それにしても仲いいよね、アヤノちゃんとハルカちゃんは。」

「ちよつと、子供扱いしないでよ！ムサシ隊員！」

とアヤノがムサシに詰め寄った。

「ちゃんとアヤノ隊員と呼んでよ！アヤノ隊員と！」

すると、ハルカがくすくすと笑っていた。

「どうしたんだ、ハルカ。」

とヒウラが声をかけた。

「いや、私の世界でもこんなやりとりがあつて、変わってないなと思つて。」

「コスモスの中で？」

とシノブも聞いた。

「ええ。ほんとあのまんまですよ。」

とハルカが答えた。

そこに警報音が鳴り響いた。

アヤノは席に戻りすぐにエイジャーMAXを操作し、状況を伝えた。

「大熊山に怪獣出現！メインスクリーンに出します。」

メインスクリーンに赤を基調とした体と羽根を持ちくちばしの付け根の辺りから左右にふくろのようなものがぶら下がっている巨大な鳥が映し出された。

「これは、火山怪鳥バードンです！でもこれはメビウスの世界の怪獣のはず。」

とハルカが伝えた。

「これも世界が交わってしまった影響で現れたんじゃないや。」
とドイガキが懸念した。

「そうです。バードンは危険な怪獣です。」

「どう危険なんだ？」

とフブキが聞いた。

「あいつは、猛毒を有しているんです。市街地に出してしまう前に対処しないと大変なことになってしまいかねません!」
とハルカが伝えた。

「よし、市街地に出る前に被害を防ぐ! TEAM EYES 出動!」
「了解!」

今回も前回と同様に1号機にヒウラとフブキ、2号機にシノブとドイガキ、4号機にムサシとハルカが搭乗している。

「テックサンダー、大熊山上空に到着。」

とフブキが伝える。

「ムサシとハルカは逃げ遅れた人がいないか探してくれ。」

とヒウラが伝えた。

「了解。」

と同時に返事をし、4号機は着陸した。

「1号、2号は威嚇弾でバードンの進攻を阻止する。」

「了解。」

返答と同時に2機から威嚇射撃が放たれた。

「威嚇射撃が始まった。急いで探さないか。」
とムサシが言った。

「そうだね。と言っても人氣が無いね。誰も居ないのかな。」

「うん。本当に誰も居ないのかな?」

しばらく歩くと衝撃の光景があった。さっき居たところは木が生い茂っていたのだが今居る場所には立ち枯れが起こっているのだ。

「ハルカちゃん、これは?」

「これもバードンの影響。バードンの猛毒で立ち枯れが起きてるの。」

次の瞬間、バードンがムサシ達に気づき攻撃してきた。
ムサシとハルカは左右に分かれて回避した。

「キャップ、バードンが！」

ドイガキが叫んだ。

「ムサシ隊員、地上に人はいるの？」

とシノブが通信を飛ばした。

「いえ、誰もいません。」

「わかったわ、すぐに機体に戻って。」

「了解！」

「フブキ、シノブ、ドイガキ、2人の時間稼ぎをするぞ。攻撃開始！」

とヒウラが指示を飛ばした。

「了解！」

2機からブライトレーザーが进った。

「ハルカちゃん、キャップ達が時間を稼いでくれてる。今のうちに4号機に戻るんだ。」

と言うとムサシはバードンの方向に向かった。

「ムサシ、どこ行くの？」

「バードンと戦う。先に言ってる。」

ムサシはハルカが自分がコスモスだと言うことを知っているのと誰にも漏らさないということを約束しているためにあえて言った。

ムサシの後ろ姿を見ていたハルカは胸騒ぎがしていた。

ムサシは人気の無い場所でコスモブラックを取り出し、真上に振り上げた。

「コスモオオオオス！！！」

すると、バードンの前に光の柱が現れ、その中からウルトラマンコスモスが現れた。

「コスモス！」

とハルカが期待の声を上げる。

コスモスがファイティングポーズを取るのと同時にバードンが巨体で風起こしをしてきた。あまりの強さに周りが見えなくなるほどになっていた。コスモスはそれを連続バック転で回避した。5回ほどしたところでコスモスがバードンを見ると火炎放射をしてきたがコスモスは上空へ飛ぶことで回避したが次の瞬間バードンのくちばしがコスモスの腹部を直撃し猛毒がそこから入ってしまった。

「ムサシ！」

思わずハルカはムサシの名を叫んでいた。彼女の胸騒ぎが的中してしまったのだ。

「キャップ、コスモスが！」

「援護だ！コスモスを援護だ！」

「了解！」

ブライトレーザーがバードンに直撃し気がそがれたのか空に飛んで行った。コスモスは地面に着地したがうつ伏せに倒れるようにして消えてしまった。

ハルカはコスモスが消えた方向めがけて走り出していた。バードンの猛毒をもろに受けたためにムサシの安否を気にしているのだ。しばらく走るとムサシがうつ伏せの状態で倒れていた。

「ムサシ、しっかりして。」

だがムサシは目の下にくまを浮かべ、大量の脂汗に苦しそうに「はあ・・・はあ・・・」と荒い息をしていた。

そこにヒウラから通信が入った。

「ムサシ、ハルカ、無事か？」

ハルカは我を忘れたような声で答えた

「キャップ、ムサシが！」

ただならぬことを感じたヒウラ達は、ハルカにムサシを乗せて4号機を操縦するように伝えて3機はトレジャーベースに帰還した。

バードンの猛毒をあびたムサシはすぐにメディカルセンターに収容され治療を受けた。

アヤノが指令室に戻るとヒウラが声をかけた。

「どうだ、ムサシの容態は。」

「治療を受けて、安定してるそうです。ハルカ隊員が向こうにいます。」

「ハルカちゃんが1人で？」

と心配そうにヒウラが聞いた。

「ええ。私も一緒にと言ったんですが、戻って下さいと言われて。」

「ハルカちゃんも辛いはずなのに・・・。」

「キャップ、ハルカ隊員のところに行ったらどうですか？ここは私達がやるので。」

とシノブが親切に言った。

「そうだな。でも俺だけじゃ気を使わせるだろうからアヤノも。」

「分かりました。」

そう言つて2人はハルカの元に向かった。

病室にはベッドに横たわるムサシと看病しているハルカの姿があった。だがハルカはムサシをこの状況に追い込んでしまったことを悔いて、涙を浮かべていた。

「ムサシ、ごめん・・・。」

そこにアヤノとヒウラが入ってきた。

「ハルカちゃん、大丈夫？」

と刺激しないようにアヤノが声をかけた。

「キャップ、アヤノ隊員。」

と涙を隠して答えたつもりだったがどうやら隠しきれていなかったようだ。

「ハルカちゃん、泣いていたのか。」

「い・・・いえ、泣いてなんか・・・。」

とハルカは気丈に振舞ったがヒウラは本心を見抜いていた。

「我慢しないでいいぞ。辛いんだろ、こんな目に遭わせたことが。」

「1人で抱え込まなくていいんだよ。ハルカちゃん。」

「キャップ、アヤノ隊員。」

それからしばらく沈黙の時間が流れた。だがこの時間はハル力が気持ちを落ち着けるのに十分だったかもしれない。

「私、向こうの世界でも見たんです。こういう場面を。」

「そうか、だから少しは分かっていたのか。」

「でも見たのはメビウスの中です。まさかこの世界で！？とも思ってる自分もいます。」

「でもムサシは大丈夫だよ。悪運だけはものすごく強いんだよ、彼は。」

と笑顔でアヤノが言った。

「それ、知ってますよ。悪運の強さには笑っちゃいますよ。」

と皮肉そうにハル力は答えた。

「お、いつものハル力に戻ってきたな。」

「そうですね。」

と2人がハル力の様子の変化に気づいた。

「そうですか？」ときよんとした顔でハル力は聞いた。

「うん。もどってるよ。もう遅いし、ここは私が看てるから寝た方がいいよ。」

ヒウラが時計を確認して同調するように言った。

「そうだな、もうこんな時間だしアヤノに任せた方がいいな。」

「じゃあ、お願いします。」

「任せて、ハル力ちゃん。」

アヤノが答えると2人は病室を出て行った。

翌日、EYESの指令室でバードンに対する作戦会議が行われていた。そこにはハル力の姿もある。

ヒウラの配慮で休んでもいいと言われたが、ハル力をこれを拒否したのだ。自分のやれることをやりたいと言って。

「でどうするんだ？コスモスでもしとめられなかったんだ。」
と真っ先にフブキが口を開いた。

ハルカの意見を参考にしたいと考えたヒウラはハルカに意見を求めた。

「ハルカ、何か手立てはあるのか？」

「バードンは私のいた世界でも強敵怪獣として描かれてました。ウルトラマンを倒したことだってある。」

その言葉に暗い空気が流れた。

「ウルトラマンは勝てなかったの？」

とシノブが聞く。

「いえ、最初は勝てませんでしたが再戦で何とか勝ちました。」

「じゃあ、問題はないんじゃないのか？」

とフブキが聞いた。

「奴を倒すとなると倒した際に飛び散るかも知れない猛毒を考えないとなりません。なるべく隔離できるところで倒さないといけません。がほかにも手立てはあります。ただ、それは厄介なんです。」

「どういうことだ？」

「奴の頬袋の静脈を狙撃するんです。これには精密射撃が必須事項です。」

「面白い、俺がやる。」

とフブキが真っ先に答えた。

「フブキさんがやるなら問題は無いですね。EYESーのパイロットですからね。」

「さすがね、ハルカ隊員。」

とシノブが褒めた。

そこに警報音が鳴り響いた。

「バードンです！場所は大熊山です！」

とアヤノが伝えた。

「よし、ハルカが立案した作戦で被害を防ぐ！」

そこに病院服姿のムサシが入ってきた。それにハルカがいち早く気づきムサシの体を支えた。

「僕も出撃します。」

「ムサシ、その体じゃ無理だよ。」

「お前は黙ってる。病人がいても足手まといになるだけだからな。」
とフブキは冷たく言ったが彼なりの優しさでもある。

「しかし・・・」とムサシが出撃しようとしたがヒウラがそれを止めた。

「心配するな。ハルカが凄い作戦を立ててくれた。」

「ハルカちゃんか？」

「うん。大丈夫。私達がやるから。」

そうハルカが言っているとムサシは引き下がった。

「よし、EYES 出動！」

「了解！」

前回の出撃と同様に出撃した。だが4号機にはハルカだけが搭乗している。

大熊山に到着したEYESはすぐに作戦行動に入った。

「ハルカの作戦通りに行動する。2号機、4号機はバードンの進攻を阻止しつつ隙を作ってくれ。」

「了解。ハルカ隊員行くわよ。」

「いつでもどうぞ。」

「ハルカ、分かっていると思うが感情的になるなよ。」
とヒウラが念を押した。

「大丈夫です。」と短く答えた。

2号機から威嚇弾、4号機からブライトレーザーが迸った。だがバードンも火炎放射で応戦してきた。3機は散開して回避して、再び役割を果たして行った。

「今度は絶対にやらせない！」

その間にフブキはチャンスをつかがっていた。

指令室では、バードンとの戦闘をムサシが見ていた。アヤノはオペレーターの役割をしているためにモニターを見てはいなかった。何

度も回避したり、攻撃したりの繰り返しを見ていてムサシはいてもたってもいられなくなった。ムサシは無言で司令室から出て行った。「ムサシ、どこ行くの？」とアヤノが言ったがムサシはためらわずに出て行った。

ムサシは、トレジャーベースの外に出てきてコスモブラックを取り出し、真上に振り上げた。

「コスモオオオス！！！」

ムサシはウルトラマンコスモスとなり、仲間の元へと向かって行った。

「くそ！これじゃきりがない！」

とフブキが毒づいた。

「もう少しだけ待って！」

とハルカが叫んだ。

そこにコスモスが現れた。だが、まだ毒が残っているのかカラータイマーがすでに点滅している。

「コスモス……。まだダメージがあるのに。」

とハルカが呟いた。

コスモスはコロナモードにチェンジし、バードンに向かった。バードンは火炎放射で応戦してきた。コスモスは、それを回避して、パンチやキックで応戦した。コスモスの素早い攻撃にバードンは反撃することが出来なくなっていた。

「コスモスは戦い方を変えている。」

とヒウラが気づいた。

ハルカはブライトレーザーで援護した。

「コスモス、あなたは1人で戦ってるんじゃない。みんながついてる！」

4号機の攻撃にバードンが後方に押されていた。そしてコスモスは、ソーラーブレイブキックを繰り返してバードンを押さえ込んでこう言

った。

「撃て。」

「フブキ今だ！」とヒウラも続いて言った。

「発射！」

1号機の攻撃は見事静脈に命中し、バードンが苦しみだした。そこにコスモスはバードンから離れ、ブレイジングウェーブを放ち、バードンを倒した。

「やったー！」

とハルカが喜んだ。

「ハルカ、よくやったな」

「ありがとうございます。」

コスモスはハルカにサムズアップした。ハルカもそれで返した。コスモスは空に飛んで行き、EYESも帰還していった。

翌日、ムサシは無事に退院し復帰してきた。

「無事に退院して何よりだ。」

とヒウラがムサシに言った。

「よかったよ。ムサシ。」

アヤノも同調した。

「ハルカ隊員、ずっと心配してたのよ。」

「そうなんですか？」

とムサシは聞いた。

「でも悪運だけは強いからね、ムサシは。」

とハルカは答えた。

「なんだよ、悪運って。」

「それ以外にどう言えるの？」

「それは・・・」と言葉に詰まってしまった。

「まあ、いいじゃないか2人共。」とドイガキが間に入った。

「まったく心配させやがって・・・」

とフブキが呟いた。

「そういうフブキさんこそ嬉しいんじゃないですか？」

「何だと？俺はそこまで暇じゃないからな。」

とハルカの言葉に反発した。

「照れちゃって。」

とハルカは呟いた。

ハルカはEYESの隊員として、戦う決意を新たにした。

第3話 「逆境を打ち破れ！」（後書き）

蜚が村に現れるカオスヘッダー。だがカオスヘッダーは有機物だけでなく無機物をも怪獣とする能力を持ち合わせていた。故郷が危機にさらされたフブキはカオスヘッダーに刃を向ける。

次回、ウルトラマンコスモス クロスオーバーワールド第4話「蜚が村の決戦」

3つの世界を取り戻し、未来を切り拓け！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5458z/>

ウルトラマンコスモス クロスオーバーワールド

2012年1月5日21時48分発行